

論文

観光する頭目、観光資源化される頭目、 観光をリードする頭目

——台湾原住民族ルカイの伝統的な社会階層制度と文化観光との絡み合い——

Talyalalai as Travelers, Tourism Resources, and Leaders of Tourism Initiatives : The
Entanglement of Traditional Chieftainship and Cultural Tourism among the Rukai,
Indigenous Peoples of Taiwan

尤驍*
YOU Xiao

This paper examines the interrelationship between traditional social institutions and cultural tourism among the Indigenous Peoples of Taiwan, with a particular focus on the traditional Rukai chiefs, known as 'talyalalai'. It traces the history of tourism involving Indigenous Peoples of Taiwan, from the Japanese colonial era to the present. Various entanglements between the traditional Rukai chieftainship and cultural tourism are explored through case studies, including *taltalalai* who were forced to travel to Japan during the colonial period, those who were turned into cultural resources for tourism, and those who currently lead tourism initiatives in their communities. Through these case studies, the paper illustrates how cultural tourism has fostered new logics that support traditional social institutions, which have been weakened by colonization and modernization—similar to a process of 'grafting'.

キーワード：文化観光 (cultural tourism)、台湾原住民族 (Indigenous Peoples of Taiwan)、ルカイ (Rukai)、頭目制度 (chieftainship)、「接ぎ木」('grafting')

1. 序論

本論文では、台湾の先住民族、いわば「台湾原住民族」における文化観光産業の発展と伝統的な社会制度との間の相互関係について、南部山地に居住する民族集団ルカイ (*Ngudradrekai*、魯凱族) の伝統的な社会階層制度 (「頭目制度」) を手がかりとして考察することを目的とする。具体的に日本植民地期から今日まで、ルカイの伝統社会権威者である「頭目」(*talyalalai*)¹と観光と間にある多岐にわたる絡み合いを整理し考察する。それを通じて、文化観光が先住民族の伝統文化を資源化して消費しながら、時代とともに変容しつつある伝統的な社会制度を支える新たな論理を、「接ぎ木」のように創り出している状況を提示したい。

台湾原住民族の村落での文化観光の歴史は日本植民地期に遡るが、特に 1980 年代以降から急速に発展してきた (汪 2014 : 132)。今日、多くの原住民族の村落にとって、観光産業は不可欠な中心産業の 1 つであり、観光客との関わりが村落住民の日常生活の一部となっている。台湾原住民族の観光についての研究は、1980 年代から観光産業の発展とともに盛んになり、文化人類学、観光社会学、観光政治学、歴史学、経営学など多くの分野の研究が蓄積されている。本稿では紙幅の都合上、とりわけ文化、社会に関する観光研究に焦点を当てたい。

台湾の人類学者・謝世忠が 1994 年に出版した『山胞観光』は、当時「山地同胞」(略称、「山胞」)と呼ばれていた台湾原住民族の観光についての文化人類学的な研究の嚆矢である。同書の中で、謝 (1994a) は原住民族観光を分析するために、観光地による「原住民文化」の表象、観光客の行動、原住民族の人々による観光への参与といった、3つの視点を包括するアプローチを確立した。さらに、彼は「原住民文化」が表象されるプロセスと、それに関わる行政機関、民間資本、研究者、原住民族出身の観光関係者、漢人の観光客などの複数のアクターの

¹ ルカイの伝統社会権威者に対し、全般的にタリアラライ (*talyalalai*) と呼ばれているが、村落の権力構造の一番上に立つ最高の権力者に対して各村落での呼称が異なっており、ヤタヴァナン・タリアラライ (*yatavanan talyalalai*) やラウデ (*raedre*)、トゥムス (*tomoso*) などの呼び方がある。本稿では便宜上、「頭目」(*talyalalai*) を一括して表記する。

相互関係を分析し、当時の原住民族観光を類型化した(謝 1994a:12)。彼はとりわけ台湾のマイノリティとしての原住民族とマジョリティである漢人との不平等な権力関係に着目し、「原住民族文化」の表象と漢人の観光客の観光実践が常に不平等な権力関係を再生産していることを批判している(謝 1994a:166)。

これ以降の研究は、謝の議論を踏まえながら発展させ、原住民族観光における権力関係と観光活動における原住民族の主体性獲得について議論されてきた(紀 1998, 2005; 張ほか 2006; 竹尾 2008)。また、汪(2014)のように、原住民族／漢族という二項対立に囚われず、台湾での政党政治や中国大陆との統一／独立の政治問題というマクロな視点から原住民族観光を考察する観光政治学の議論も現れている。

さらに、原住民族観光の現場におけるミクロレベルでの実践に着目する研究も盛んに行われている。歌謡、舞踊、伝統祭典をはじめとした「伝統文化」が、原住民族の演者によって観光客に向けて「演出」される際、「伝統文化」を表象する手法や真正性を確保する取り組みがしばしば議論されている(謝 1994b, 胡 1997)。また、1990年代以降、原住民族村落での文化観光産業が急速に発展するとともに、個別の原住民族村落での観光実践を対象とするケーススタディが豊富に蓄積されてきた(ヤユツ 2009; 楊 2011; 王 2013, 2015; 卓 2017; 尤 2022)。近年では、原住民族の出身者が自民族や出身の村落の伝統文化と観光産業との関わりについての論考も増えつつある(e.g. 陳・陳 2014; 陳 2016; 呂呉 2020)。

一方、既存の研究で取り上げられている台湾原住民族の「伝統」や「文化」は、もっぱら歌謡、舞踊、伝統祭典、民族衣装、芸術品などの有形文化に偏っている傾向が見受けられる。一方、社会制度や宗教信仰など、文化の無形的な側面と文化観光産業との相互関係についての議論に不足していると指摘できる。

本稿の調査対象であるルカイの文化観光についての研究においても、伝統的な社会階層制度と関わる華麗な造形芸術や伝統祭典などの有形文化の観光資源化についての論考が多い(笠原 2005; 王 2013, 2015; 尤 2022)。文化観光が伝統的な社会階層制度という文化の無形的な側面に与える影響を議論する際、伝統的な社会権威者である「頭目」が弱体化されつつあるというネガティブな影響が一方的な語られる場合が多い(e.g. 陳 2016)。その反面、文化観光が伝統的な社会階層制度に与えるポジティブな影響をも視野に入れ、両者の相互関係についての論考はいまだに数少ない。

以上の先行研究を踏まえて、本研究では、ルカイの伝統的な社会階層制度を手がかりとして、これまで十分に議論されていない無形的な伝統的な社会制度と文化観光産業との相互関係を考察したい。観光産業が伝統的な社会制度に与える影響に対し、ただ一方的に破壊を与えるという「消滅の語り」だけではなく、観光産業は絶えず新たな民族文化を創り出し、既存の伝統文化に新たな意味合いを付与するという「生成の語り」(cf. クリフォード 2003)を視座とする。次節から台湾原住民族の歴史と概要、台湾原住民族の観光史およびルカイの頭目制度も変遷を逐次に説明した上で、「観光」させられた頭目の経験、観光資源とされる頭目の文化、観光産業に従事する頭目の実践といった3つの角度から頭目と観光との多岐にわたる絡み合いを整理し考察していく。

2. 台湾原住民族の概要

台湾原住民族とは、現在台湾の人口の大多数を占めている漢族系の住人より古くから台湾島ならびその周囲の島嶼部に居住してきたと考えられているオーストロネシア系先住民の総称である(野林・宮岡 2009:293)。その中には、複数の民族集団があり、現在はタイヤル(泰雅、Atayal)、サイシャット(賽夏、Saisiyat)、ブヌン(布農、Bunun)、ツォウ(鄒、Tsou)、パイワン(排灣、Paiwan)、ルカイ(魯凱、Rukai)、プヌマ(卑南、Pinuyumayan)、アミ(阿美、Amis)、タオ(達悟、Tao)、サオ(邵、Thao)、クヴァラン(噶瑪蘭、Kavalan)、タロコ(太魯閣、Truku)、サキザヤ(撒奇萊雅、Sakizaya)、セデック(賽德克、Sediq)、サアロア(拉阿魯哇、Hla'alua)、カナカナブ(カナカ那富、Kanakanavu)といった16の民族集団が公式に認定されている。総人口は現在約58万人であり、台湾総人口の約2.5%を占めている。マジョリティである漢族系の住人と比べて、圧倒的なマイノリティ状況に置かれている。

台湾原住民族の各民族集団の伝統的な社会制度は、それぞれ際立った差異をもっている。例えば、顕著かつ強

固な父系クランをもち、世襲的なリーダーシップのないブスンや、母系的な傾向が強いと同時に男性の年齢階級制を発達させたアミなどが取り上げられる。その中において、南部山地に居住しているルカイは、近隣のパイワンとともに、貴族と平民という世襲的な地位身分に基づく社会階層制度を中心とした政治制度を特徴とする。地位身分の頂点に立つ伝統的な権威者は、中国語で「頭目」と呼ばれている一般的である。

17 世紀の前半から、台湾原住民族の人々は、次々に台湾島に到来した外来の統治者から翻弄されてきた。オランダ（1624-1662、南部と中部）、スペイン（1626-1642、北部の一角）、鄭氏政権（1661-1683）による台湾の統治を経て、200 年あまり続いた清国の統治（1683-1895）、日本の植民地統治（1895-1945）、それに戦後の中華民国政権（国民党政権）の統治の下で、原住民族の社会は変貌を余儀なくされた（笠原 1998：16）。

特に日本植民地統治から戦後の国民党政権にわたって、近代化の進展とともに、近代政治システムの末端の一端とされた原住民族社会は、近代官僚制度の導入、土地私有化の確立、市場経済への編入、中国語による学校教育およびキリスト教への入信などの外来の近代的要素によって大きな変容を遂げた。

このような社会状況のなかで、台湾原住民族は、社会的・文化的に消滅の危機に瀕するようになった。1980 年代の半ばから、世界各地で沸き起こり始めた先住民族の復権運動、および台湾社会の民主化・自由化・本土化を背景とし、台湾原住民族の権利回復運動、いわば「台湾原住民族運動」が盛り上がった。1990 年までの台湾原住民族運動は、主に原住民族エリートの指導のもとで都市部で行われた。共通する抑圧的な社会状況によって形成された、各民族集団の境界を超える「汎原住民族意識」に基づく「汎原住民族運動」である（謝 2017（1987）：81）。1990 年前後になると、台湾原住民族運動の焦点は都市部から、中国語で「部落」と呼ばれる原住民族の伝統的な村落へと移った。「部落」の再建と振興を掲げた「部落主義」論が盛んになった（台邦・撒沙勒 1993：38；汪 2006：17）。

1990 年代から、「部落主義」の呼びかけの下で、原住民族村落に戻った青年たちはもともと村落にいる人々と結びついて「部落再建運動」を展開してきた。また、同じく 1990 年代に、本土化政策を掲げた李登輝政権は「社区総体营造」政策を掲げて、地方産業の振興を推進した。「部落再建運動」と「社区総体营造」の 2 つの動きが絡み合う状況を背景に、原住民族の人々は、行政機関からの助成金を利用しながら、村落での産業経済の振興と伝統的な社会組織の復興を盛んに推進していた。この風潮のなかで、原住民族村落での観光産業が盛んに発展してきた（尤 2022：14）。

3. 台湾原住民族の観光史

台湾原住民族観光の歴史は日本植民地期に遡る。その時期では、原住民族が「見られる」観光、いわば一般的な意味での文化観光より、原住民族が「見る」観光が先に行われた²（張ほか 2003；鄭 2021）。日本が台湾の占領した間もなくの 1897 年から、原住民族を日本や台北などの「文明」の地域を「観光」させる政策が始められ、終戦まで継続された。観光者は本来原住民族の頭目などの伝統的な社会権威者たちが中心であったが、1920 年代後半になると日本語教育を受けた青年たちが主流になった。観光の対象は大都会（東京、大阪、京都、台北など）、軍事施設（砲兵工場、騎兵連隊、飛行訓練など）、現代技術（自動車工場、発電所など）、農業施設、学校、神社などで、植民地政府の人口の多さ、武力の強さ、技術の先進さを原住民族に見せることから反抗心を無くし、「日本国民」や「皇民」として同化する思惑があった（張ほか 2003：51；松田 2014：40）。無論、懐柔や威喝、もしくは「教化」の手段とされたこのような「観光」は、リクリエーションのための自由移動を基とした今日の観光活動とは程遠いものであった（鄭 2005：291）。

一方、1910 年代半ばから、原住民族に対する征服事業がほぼ終了したにつれて、原住民族が「見られる」観光

² 一方、原住民族が「見る」観光は常に、日本人や漢族の人に「見られる」経験が伴っている。例えば 1897 年の原住民族の日本観光団は日本の新聞に大々的に報道され、「野蛮」「獐猛」という「生蕃」のイメージが日本人の好奇心を掻き立てていた（松田 2014：48）。「見る＝観光する」と「見られる＝観光される」ことが共存するのは、日本植民地期の原住民族観光の最大の特徴と指摘されている（鄭 2005：286）

も推進された。台湾各地で開催された展覧会において、「蕃産物品評会」「高砂族農産品品評会」「高砂族作品展覧会」なども行われ、原住民族の風俗や特産品が紹介され、歌謡、舞踊、生活様式の演出なども観光客の視線を集めた。日月潭の近辺に住む水沙連（現在のサオ族）をはじめ、原住民族村落での観光も推進された（張ほか 2003：52）。

戦後における原住民族観光の展開について、汪（2014：130）は（1）1945 年～1980 年代の植民同化・戒厳期、（2）1980～90 年汎原住民族運動期、（3）1990 年以降における「部落主義」と民族自治運動の時代といった 3 つの時代区分で論じている。第 1 の植民同化・戒厳期では、原住民族の独立した民族的地位や土地資源を利用する権利が否定される一方で、原住民族の自然資源と民族文化が行政機関や民間資本に一方的に主導されて資源化されていた。観光開発の中で原住民族の主体性が否定され、「原住民族文化とは全く関連のない漢式建物に、寄せ集められた原住民族の歌や踊りの上演を加え、植民地主義の観光文化の衝突および矛盾が露呈することとなった」（汪 2014：130）状況であった。

1980 年代になると、台湾原住民族の権利回復運動が盛んになり、台湾社会の震撼させる一連の街頭運動の結果、行政機関や主流社会が原住民族に対する認識が大いに変化した。それに伴い、原住民族観光の形も変化し、多様化になった。謝（1994a：12）はこの時期の原住民族観光を、（1）原住民族の人口の割合が高い都市での原住民族観光（花蓮タイプ）、（2）原住民族の生活地域で行われる原住民族観光（蘭嶼タイプ）、（3）コミュニティ総動員の原住民族観光（徳化・烏來タイプ）、（4）集中展示の原住民族観光（台湾山地園区・九族文化村タイプ）といった、4 つのタイプと大別している。

そのなかにおいて、第 1 のタイプと第 2 のタイプでは、依然として漢族の資本が主導権の独占し、原住民族の主体性が排除され、漢族の観光客が原住民族に対する「野蛮」、「原始」などといった植民地的な文化表象が観光を通して再生産されていた。第 3 のタイプにおいて、徳化（サオ族）と烏來（タイヤル族）の住民は総動員して観光産業に関わることは、当時原住民族の人々が観光の主導権を握る稀なケースである。しかし、マイノリティとしての原住民族はやはり経営学研究科に様々な困難を直面していた（謝 1994a：46）。第 4 のタイプにおいて、1986 年に南投県魚池郷に開発された「九族文化村」と 1987 年に屏東県瑪家郷に開園された「台湾原住民族文化園区」（旧名、台湾山地園区）が挙げられる。この 2 つの施設は今日において依然として原住民族観光の重要な目的地である。前者は民間資本が運営し、各民族の伝統建築、歌謡・舞踊のパフォーマンス、伝統工芸の実演、民族料理の試食などに加えて、遊戯施設も併置されている。後者は政府機関が運営し、レクリエーション機能に加え、人類学、歴史学などの研究機能、教育機能も組み入れられた。近年になると、原住民族の側からの展示・運営への参加が推進されている。

1990 年代になると、台湾原住民族運動の焦点が都市部から、「部落」と呼ばれる原住民族村落に転じた。民族ごと、村落ごとの文化復興と自治運動が運動の主流として推進されてきた。「部落主義」の呼びかけの下で、多くの原住民族の青年が故郷に戻り、村落の産業振興に力を注いだ。ほぼ同時期に、「社区総体營造政策」が推進され、「文化の産業化、産業の文化化」というスローガンの下で地域住民参加型の開発が促された。この風潮のなかで、原住民族の人々は様々な民間団体・NGO を作り上げ、行政からの助成金を利用し、伝統工芸、歌謡、舞踊、伝統祭典、民族衣装などを文化資源化し、観光産業を推進してきた。現在において、原住民族の村落で行われる文化観光は、原住民族観光の主流になっている。

原住民族村落での観光産業の発展は、新たな収入源や雇用の創出といった経済効果を挙げている。一方、観光客が原住民族村落での現金消費が少ないということとその経済的な利益が原住民族自身に還元されることが少ないということは問題視されている（竹尾 2008：85；小槻ほか 2024：61）。原住民族村落の内部で観光に対する態度や利益配分をめぐる感情の亀裂も現れている（尤 2022：17）。

文化面においては、観光は、伝統歌謡、舞踊、儀礼および伝統工芸の維持・伝承の効果を提供し、一部の消滅しつつある伝統文化の復活や再活性化の契機ともなった。例えば、筆者が調査したルカイの村落・クンガダワンでは、キリスト教への入信により日常生活から完全に姿を消した女性シャーマン（*abibiki*）をめぐる儀礼は、観

光客に向けて数十年ぶりに再び演じられるようになった。一方、観光客に向けて演出される伝統文化の真正性に問題視し、違和感を覚えている人もいる。観光客の差別的な眼差しや言動、および外来の観光ガイドの文化解説にある誤解や間違いに対して不快を感じる人も少なくない。なお、近年から、従来のマストツーリズムの異なり、エコツアーなど原住民が主体性のもつ新たな形の観光も推進されている。

ポジティブな側面もネガティブな側面もあるが、現在、観光は多く原住民族村落にとっては、すでに欠かせない産業の一つとなった。観光で形づくられてきた「伝統文化」は、現在原住民族の人々、とりわけ若年者たちにとって、自分の社会文化の一部となっており、エスニック・アイデンティティのよりどころともなっている状況が見受けられる（尤 2022：30）。

4. ルカイの社会階層制度

(1) ルカイの伝統的な社会階層制度

ルカイは台湾島南部（屏東県、高雄市、台東県）の山地に居住し、約 1 万 3000 人の人口をもつ原住民族の集団である。伝統的に焼畑農耕を主な生業として、イモ類、アワ、キビなどの作物を栽培していた。併せて狩猟と漁撈活動も積極的に行われていた。戦後、焼畑農耕をはじめ、古来の生業が村落の生活にほとんど姿を消してしまっただが、換金作物の栽培や観光産業の開発が推し進められてきた。また、就労・就学を理由として平地、都市への転出者も多い。

植民地化以前の、いわゆるルカイの「伝統社会」において、基本的な政治単位を成しているのはツクル (*cekele*) と呼ばれる村落である。ツクルは自立性が強く、それを超える政治組織は存在しない（馬淵 1974(1941)：266）。ルカイの主な村落はオランダ植民地期から日本植民地期までほとんど変化していない。地理的なまとまりとして、「隘寮群」、「濁口群（下三社）」、「大南群」の 3 つのグループに分けられることがある。それぞれに隘寮群が屏東県霧台郷にあるコチャボガン、ブダイ、アデル、キヌラン、ラブアンなどの村々、濁口群が高雄市茂林区にあるクンガダワン、テルルカ、オポノホの三つの村落、大南群が台東県卑南郷のタロマクに対応している。3 つのグループの間に顕著な文化、言語の差異が見出される。

ルカイ社会は伝統的に社会階層制を有している。人々は世襲の貴族層タリアラライ (*talyalalai*) と平民層カオカオル (*kaokaolu*) と大別される。貴族層の頂点には頭目家があり、1 つのツクルのなかには 1 つの頭目家がある場合もあれば、複数の頭目家がある場合もある。ツクルの全ての人々がある神話上の祖先の子孫であると信じられ、その祖先の直系的な子孫がツクルを支配する頭目である場合が多い。頭目家とその近親者たちが貴族層を構成し、平民層と歴然とした地位身分の差異をもっていた（笠原 1998：94）。貴族層の内部においても、その頂点に立つ頭目家との系譜上の距離により地位の差異が形成されている。また、同じく平民層と呼ばれる人々の間でも、過去に頭目の系譜を引く祖先がいたか、それとも純粹の平民かということで、微妙に地位の差異が生じてくる（笠原 1993：105）。

頭目は、名目上ツクルの全ての土地を領有した。土地を利用する平民から収穫物の一部を貢納 (*sualupu*) とし、徴収する特権と、特定の模様やモチーフを独占する装飾の特権などをもち、ツクルの生活の様々な側面で権威を有していた。頭目を中心としたツクルの社会組織の統合において、土地所有に基づく食糧の再分配と名誉観念に基づく装飾特権の再分配が重要な役割を果たしていた。頭目に納められた貢納は、その一部が頭目家の私的な消費に割り当てられるほか、ツクルの共同祭祀で大量に消費されていた（山路 1991：204-205）。また、頭目は災害が起こった時に蓄積した食糧を配分し、身寄りのない孤児や老人を扶養する義務を負っていた。

加えて、頭目家や貴族層の特権として、ルカイは、古壺、トンゴ玉、クマタカの羽などのモノ、そして百歩蛇、人面などのモチーフを使う刺繍、木彫など華麗な造形文化を発達させた。それらの特権的な装飾物の多くは、頭目家の神話的起源を具現化している。平民層の者は、戦争、首狩りや狩猟で武功を上げた場合に、名誉として貴族層の一部の特権的装飾物を使用する権利が授与されることも可能であり、それをめぐる儀礼も発達していた（許 1991）。

(2) 植民地化以降における社会階層制度の変化

一方、日本による植民地化以降、ルカイのツクルの自律性が収奪され、近代国家の末端に編入された（松岡 2011：42）。それによって、ルカイの身分階層制度は大きく変容した。日本の植民地統治により、頭目の慣習的な土地所有が否定され、さらに戦後の国民党政権の下で、土地の私有制が確立された。それによって、食糧の貢納と再分配の制度が次第に解体した（王 1985：148）。土地所有制度と再分配の制度の解体により、頭目は従来の経済基盤を失い、自ら農作業や賃金労働で生計を立てるようになった。貧困に陥った頭目家の出身者も少なくな

い。また、日本植民地期から村落間の戦争と首狩りが禁止され、戦後になると狩猟活動も大きく制限されるようになった。したがって、首狩りや狩猟で武功を挙げて頭目から名誉的な称号と装飾特権が授与される従来の獲得的な地位上昇のルートも崩壊した。一方、日本植民地期において、日本語教育が次第に普及され、ルカイの人々には「国民精神」や「日本精神」などの新たな価値論理がもたらされた。戦後、原住民地域に「山地郷」とその下位区画の「山地村」が設置され、地方選挙での成功、経済的成功、高等教育を受けることは、新たな人物の評価基準と社会的上昇のルートになったのである（王 1985：151；笠原 1993：118）。ルカイの頭目には積極的に選挙に関与する人がいたが、頭目制度そのものは行政機関からの承認と支持を受けず、行政制度に組み込まれなかった。逆に、民主選挙によって選出された郷長、地方議員、村長などの行政官僚が次第に頭目にとって代わり、村落での政治権力の中心的な立場を占めるようになった。

さらに、1950 年代からキリスト諸教派がルカイの諸村落において積極的に布教し、大部分の住民がキリスト教に入信した。キリスト教会は従来の信仰と儀礼に対して否定的な態度を取り、それらを「迷信」として禁止していた。キリスト教の普及につれて、従来の儀礼と祭祀が次第に消滅し、それとともに頭目は宗教的な権威の基盤を失った（王 1985：150）。

これらの変化によって、平民層まで及ぼす頭目の権威と、ツクルを統合させる制度的な連帯が弱体化したのである。そして、各頭目家の間、または頭目や貴族と自称して威信を獲得しようとする者との間での羨望や不和が増え、貴族層と平民層の間の対立と紛争が激しくなった（笠原 1993：119；尤 2020：92）。制度的な保証を失った頭目はもはや、「複数の社会的権威者のなかの一人」にすぎなくなった。頭目の役割は「伝統的」な場面に限られ、社会生活に周縁化されるようになったのである（尤 2018：77）。

ところが、1980 年代の台湾原住民族運動以降、原住民族社会が伝統文化を重視する傾向が高まった。さらに、伝統文化を資源とする文化観光産業も 1990 年代の後半から、ルカイの村落で盛んになっていった。文化観光産業の発展とともに、伝統祭典の観光化も推進されるようになった。これらの社会変化にともない、ルカイの社会生活のなかで「伝統的」な場面が増殖した。「伝統的」な場面において、頭目はしばしば従来の文化的・社会的役割や、新たに付与された役割を果たすことが期待されている。個々人の頭目が、村落における冠婚葬祭や観光化された伝統祭典、そして政治運動などに積極的に参与し、頭目という身分を顕在化させている状況も現れたのである（尤 2020：86）。また、また、頭目が従来独占していた特権的装飾物は、社会階層制度と分離されて村落共有の文化資源とされている。かつて貴族の象徴的特権として独占された造形文化は、現在では貴族と平民の差異を越えて、ルカイという民族集団のシンボルへと意味を変え、エスニック・アイデンティティの拠り所となっていると指摘されている（笠原 2005：182）。

次節では、ルカイの頭目とそれをめぐる諸制度と、文化観光産業との間の多岐にわたる絡み合いを整理する。その上、文化観光が先住民族の伝統文化を資源化して消費しながら、時代とともに変容しつつある伝統的な社会制度を支える新たな論理を、「接ぎ木」のように創り出している状況を提示して考察する。

5. 頭目と観光の間における多岐的な絡み合い

(1) 観光させられた頭目

日本が台湾の占領した間もなくの 1897 年に、台湾原住民族の第 1 回「内地」（日本本土）への観光が早速に行

われた。観光の目的は、各民族の「頭目」をはじめ、原住民族社会の中で旧来から社会的影響力をもる「勢力者」層の人物に「内地」の事物を見学させることで植民地政府への抵抗心を削ぐことである（松田 2014：40）。当時日本の植民地統治が浸透した限られた原住民族の居住地域にタイヤル、ブヌン、ツォウ、ルカイ³各族から、計 10 名⁴の「勢力者」が選択された。名簿⁵に記載される参加者の肩書を見ると、それぞれ「総土目⁶」1 名、「土目」4 名、「副土目」1 名、「土目長子」2 名、「副土目長子」1 名、「副土目次子」1 名であり、全てが伝統的な社会権威者やその近親であることが分かる。観光団一行は、同年の 8 月 3 日に基隆から乗船し、6 日に長崎到着し、門司、宇品、神戸、名古屋経由で 11 月に東京到着した。東京では皇居、靖国神社（遊就館）、上野博物館・動物園などの施設、および砲兵工場、練兵場、造兵場、軍艦などの軍事施設を見学した。21 日に横須賀で乗船し、大阪、神戸経由で、31 日に基隆に到着した。計 29 日間の観光が行われた。

第 1 回の「内地」観光の発案の経緯と詳細な旅程、および参加する原住民族の人々の経験についてすでに豊富な研究（鄭 2005；松田 2014；鄭 2021）が蓄積されているため、本稿では詳しい説明を割愛する。本稿では参加者のなかの 1 人のルカイ頭目に焦点を当てたい。

第 1 回「内地」観光の 10 名の参加者のうち、マガ（今のテルルカ）の「土目」マロ（当時 22 歳）⁷は唯一のルカイ出身者である。マガはルカイの諸村落の中で最も平地に近い村落であり、最も早く日本と接触する村落でもありとされる。マロの祖父と父は武勇と弁舌に長けており、周辺地域に大きな影響を与えた頭目であった。マロは、14、5 歳の若さで亡くなった父から頭目の地位を継承し、人徳と名誉があると評価されていた。とりわけマガと周辺村落との紛争を数回も見事に調停した功績が残されている（鄭 2021：233-234）。

マロが日本での活動と感想についての記録は未だに発見されていないが、出発前に台北に滞在する時のエピソードが記録されている。記録のなかで、彼は綺麗好きでいつも華麗な衣装を纏い、積極的に見知らぬ人と交流していた。美しい外見に加えて純粋な心をもつ、穏やかな好青年というイメージを日本人に与えた（鄭 2021：234）。マロが日本からマガに戻った後の言動は不明であるが、その 3 ヶ月後の 1897 年 12 月に植民地行政官の一行がマガ、および近隣のルカイ村落トナ（今のクンガダワン）に対して踏査を行い、報告書を残した（埤 1898）。このことから、日本観光から戻った後も、マロをはじめとしたマガの人々は植民地行政とある程度良好な関係を保っていたと推測できる。しかし、6 年後の 1903 年に情勢が急転直下した。

1903 年 12 月、マガの人々が日本人の巡查 1 名を殺害したという理由⁸で、日本の警察は 200 人の捜査隊を結成し、マガおよび共謀と考えられたトナを攻撃した。捜査隊はマガに多大な死傷を与え、家屋などを焼き払った（台湾総督府警察本署 1989（1918）：310）。その後、複数の銃創を負ったマロの死体が溪谷の中で発見されたと報道された⁹が、筆者の現地調査によるとそれは恐らく事実ではないと考えられる¹⁰。さらに、翌年 1904 年に、警察

³ 当時は近隣民族パイワンの一部と併せて、「ツァリセン族」と呼ばれていた。

⁴ 本来、12 名が選定されたが、うちの 2 名が台北で待機中、病気にかかり参加できなかった（鄭 2021：232）。

⁵ 「内地観光蕃人状況藤根〔吉春〕技師復命」『臺灣總督府公文類纂』、國史館臺灣文獻館、<https://onlinearchives.th.gov.tw/index.php?act=Display/image/34366630=mS1pY#rmxb>（2024 年 11 月 24 日最終閲覧）

⁶ 「土目」は「頭目」の古いと呼び方であり、清朝および日本植民地の初期で使用されていた。

⁷ 筆者が 2024 年 11 月にテルルカで行った現地調査によると、マロは正しく「バロ」であり、テルルカの頭目家ラダリヤ家の家長であった。現在、バロの子孫の間には、バロが日本に行き、明治天皇に拝謁した逸聞が伝わっている。一方、その詳細な見聞や感想は残されていない。

⁸ テルルカでは、日本の警察を殺害したのは平地の者であり、テルルカが攻撃されたのはその濡れ衣を着せられたという説が伝えられている。

⁹ 「蕃署寮兇蕃討伐（三）」『臺灣日日新報』1903 年 12 月 19 日 2 版。また、近年出版された文献資料には上記の記事を参照してマロの死を記録されているものが多い（e.g. 茂林郷公所 2008：80；陳 2014：97；鄭 2021：60）。しかし、後述するように、それは事実ではない可能性がある。

¹⁰ 筆者が 2024 年 11 月にテルルカで現地調査した際、マロ（バロ）の曾孫である UL 氏（60 代男性）をはじめ、テルルカの住民たちの間、日本人さら攻撃された歴史が鮮明に記憶に残っているが、頭目が殺害されたという事件についての記憶・語りがいっさいないということが分かった。さらに、UL 氏に提供された昭和時代の戸籍において、当時の戸主ラデリア アリウ（UL 氏の祖父）は「前戸主バロノ長男」、「大正拾壹年（1922 年、引用者注）九月拾九日前戸主死亡ニ付戸主相続」と記載

は平地の漢族と平埔族¹¹を動員し、4 月 11 日と 21 日に、マガの避難地に 2 回攻撃し、数十人を殺害し、家屋 44 軒を焼き払った（台湾総督府警察本署 1989（1918）：339-340）。

マロが殺害されたのは事実か否かをさておき、マガの悲惨な攻撃事件から見れば、「内地」観光は期待通りに原住民族と日本人の間に何らかの信頼関係や友好関係を築いたとは決して言えない。また、マロと同じく第 1 回「内地」観光に参加したタイヤルの「前山総土目」タイモ・ミッセルも 1900 年、日本による樟脳製造のための大規模な山地開発に抵抗し、反旗を挙げた挙句、銃殺された（松田 2014：63；鄭 2021：60）。

植民地政府への抵抗心を削ぐという第 1 回「内地」観光の目的は、この 2 つの事件からみると達成されたとは言いが、植民地行政はその後にも原住民族の観光を積極的に推し進めた。1910 年にパイワンの頭目一行はロンドンでの大英博覧会にも出席した（させられた）¹²。1911 年から 1925 年の間、計 6 回の「内地」観光が行われ、その参加者たちは第 1 回と同じく、各民族の「頭目」をはじめとした伝統的な権威者が中心であった（松田 2014：40）。この時期、ルカイの頭目の参加状況に関する資料は未だに見当たらない。一方、筆者の主な調査地であるクンガダワンでは、当時の頭目である AL 氏¹³（1894-1967）が日本に観光した経験（詳細は不明）があると、現在においてもしばしば語られ、頭目地位の根拠の 1 つともされている。

ところが、1928 年に実施された第 8 回「内地」観光から、観光の性質に大きな変化が現れた。観光の参加者は従来の伝統的な権威者にとって代わり、「先覚者」と呼ばれる原住民青年エリートが中心になった。観光の経費は官費で賄われるのから、参加者の自費負担となった（松田 2014：40）。この変化から、日本の植民地統治の方針の変化が反映されている。台湾総督府は、台湾を占領した初期において、頭目など原住民族村落の従来の権威者たちを懐柔し、間接統治のために利用していた。一方、1930 年前後になると、日本語教育が普及するにつれて、日本語に堪能で「日本精神」を身につけた「先覚者」の原住民青年が構成する「青年団」が次第に頭目にとって代わり、村落における主な統治機関として総督府に指名された（近藤 1996：266-267）。このように、頭目は観光から姿を消したとともに、原住民族村落での伝統的な権威と地位も失いつつあった。

（2）観光資源とされた頭目

戦後になると、土地の国有化・私有化、直接選挙制度と行政官僚制度の確立、キリスト教への入信、市場経済への編入、同化政策による原住民族の伝統文化の喪失など、一連の急速な社会変化により、ルカイの頭目の政治・経済・文化などの側面における伝統的な権威はなお一層低下になりつつあった。そのせいか、1980 年代までの間、ルカイの頭目と原住民族観光との間には何らかの関わりは見受けられていなかった。

一方、1990 年代以降、「部落主義」と「社区総体营造」の風潮のなかで、ルカイの人々は、自村落での「文化復興」を推進するとともに、文化観光産業をも積極的に推し進めてきた。この風潮のなかで、盛んに発展してきた原住民芸術や文化観光産業において、元来ルカイの貴族層が独占していた壺、クマタカの羽、トンゴ玉、百歩蛇、人形など、木彫や刺繍の模様とモチーフが広く利用されている（王 2013：42）。つまり、頭目は伝統的な権力を失うとともに、特権的な装飾物に対する独占も失った。これらの造形芸術は、村落が共有する「文化遺産」や「文化資産」へと転換されるようになった（王 2013：45）。この風潮のなかで、頭目と文化観光との間に多様な絡み合いが新たに現れている。

1) ブダイの事例：文化観光に弱体化された頭目

陳（2016）は、ルカイの村落・ブダイにおける文化観光の発展と、頭目を中心とした「伝統」との間の緊張関

され、更にパロの長女が「明治四拾五年（1908 年、引用者注）」に生まれたと記載されている。以上の情報から、パロは 1903 年の攻撃事件に死亡せず、1922 年まで存命したと判断できる。『臺灣日日新報』の記事は日本人の誤認か、マガの住民が頭目を庇うためにあえて虚偽の情報を提供したかと推測している。この件について更なる調査が必要であり、今後の課題としたい。

¹¹ 「平埔族」（へいほうぞく／ピンブーズウ）とは台湾島の平野部に居住し、後に漢人化された先住民族のグループである。

¹² 齋田悟「蕃人観光の沿革と其の實績」『理蕃の友』昭和九年十月号。『理蕃の友』復刻版（緑蔭書房、1993）を参照。

¹³ 本稿では参考文献に記載される人物を実名、筆者の現地調査で収集した資料での人物の名前をイニシャル表記とする。

係を報告している。彼によると、20 世紀末、文化観光が推進されている風潮のなかで、ブダイの住民は村落に「ルカイらしさ」や「伝統らしさ」を作り出すために、戦後に新築された特色のないコンクリートの住宅に、伝統家屋であるスレート家屋をモデルとした装飾や伝統的な模様のある石彫、木彫を飾るようになった。その風潮のなかで、従来頭目の家屋でしか使用できなかった百歩蛇、百合の花、祖霊柱などの模様や装飾品は平民層にも大量に使用されるようになった。例えば、ある平民層出身の芸術家が自宅を「頭目家屋」の形に改築し、頭目家の装飾特権としての祖霊柱や百歩蛇の模様を使用した。この「頭目家屋」は観光客からの人気を集め、ブダイの重要な観光スポットとなった（陳 2016：2-3）。このように従来の特権的な装飾物が大規模に観光資源化されていることに対して、すでに伝統的な権力を喪失した頭目たちはしばしば不満の声を上げているが、それを禁止する力を持っていない（陳 2016：87）。

また、観光ガイドや観光イベントの関係者、観光客向けのパフォーマンスの演者も、伝統的な地位に相応しくない衣装や装飾品を着用することが多い（陳 2016：91）。このような場合、観光の舞台が「本物」の生活と異なるという理由で住民たちに黙認される。例えば、ある観光客向けのイベントの中で、ブダイ出身の郷長が着用する権利のない百合の花を帽子に飾り、観光客に向けて自分が頭目家の末裔だという事実ではない話をした。しかし、住民たちは、彼の郷長という地位と観光という場面を配慮し、とくに非難はしなかった（陳 2016：40）。

ブダイの事例から、元来、頭目が独占していた各種の特権的な装飾物は文化観光のなかで、村落が共有する観光資源とされている状況が分かる。頭目は、下位の貴族や平民と地位の区別をつけ、伝統的な権威を可視化するための装飾物を独占する権力を失い、地位の失墜が促されている。一方、文化観光の発展は頭目という地位身分を消滅させるわけではない。次の事例で示されているように、個人としての頭目そのものも、文化観光のなかの観光資源とされ、新たな意味合いが付与された場合が見受けられる。

2) クンガダワンの事例：「伝統らしさ」の保証とされた頭目

ルカイの村落・クンガダワンでは、1990 年代後半から文化観光産業が推進されてきた。当時、クンガダワンでの文化観光産業に指導的な立場を占めていたのは、平民層の知識人を中心に創立された「社区発展協会」（以下、発展協会と略す）であった。発展協会は 1999 年、行政からの助成金を獲得し、クンガダワンの従来のアワ収穫祭とコメ収穫祭の内容を大幅に再編し、「黒米祭」という観光祭典を創り出した。当時、黒米祭の発案とその内容の企画は、平民層出身の発展協会理事長と行政関係者が中心であった。当時の頭目 NL 氏（当時 30 代男性）も企画に関わったが、さほど重要な役割を果たしていなかったことが、当時の関係者からのインタビューから分かった。

2000 年代前半にクンガダワンで調査した王（2015）は初期の黒米祭の様子を詳細に報告している。祭典では、頭目家に貢租を献上する内容が演出された。「平民」の役を演じる村民たちは、祭典の会場である運動場に木の板で仮設した「頭目家屋」に行き、「頭目」にアワ、コメ、イノシシなどの「貢租」を献上した。その後、「頭目」が観光客に向かって「貢租」の種類と数を説明した。「頭目役」は、実際の頭目である NL 氏が自ら扮したのである（王 2015：52）。頭目に「貢租」を納める慣習は、数十年前にすでに廃止された慣習であった。したがって、ここで観光客に向かって演じている頭目のイメージは、エキゾチシズムがあふれる伝統社会に属されており、現実の生活から遠ざかったものであった。

この時期に、祭典の主導的な立場にあったのは、平民層の出身者が中心となった発展協会であった。頭目 NL 氏は、ただ「頭目役」を扮する一役者に過ぎず、受動的かつ消極的な立場に置かれていたといえる。一方、黒米祭において、発展協会は、頭目 NL に「頭目役」を扮させることで、祭典に伝統らしさを確保する思惑があった。それについて、王（2015：53）は「イベントの主催者側は、頭目が頭目役に扮することで、黒米祭があまりにも生活と伝統から乖離しないように望んでいる」と報告した。つまり、頭目は、観光祭典に伝統らしさや伝統文化の真正性を保持させるための手立てとして資源化されている。

このような、観光イベントにおける受動的な頭目のイメージは、しばしば「人形立牌」（人間型の看板）や「活體雕塑」（生きる彫刻）だと人々に揶揄されている。類似した事例は他のルカイ村落でも見受けられている。

3) コチャボガンの事例：観光資源化された頭目

近年、一部のルカイ村落で行われる団体ツアーでは、観光客が頭目家屋を訪れ、そこで本物の頭目に歓迎されて記念写真を撮るのは人気の観光内容である。筆者が 2019 年、ルカイの村落・コチャボガンを訪れた際、ある団体ツアーが行った頭目家屋への訪問を観察できた。

観光客一行は、漢族の中高年男女約 30 人であり、観光ガイドは他のルカイ村落から嫁入りしたコチャボガン在住の 30 代女性であった。一行は観光バスから村落入口で下車し、徒歩で頭目の家まで移動した。そこで観光ガイドはここが頭目家屋だと説明し、ルカイの頭目制度を簡単に解説した。その後、観光客の盛大な拍手を受けながら、頭目 LK 氏（60 代男性）と夫人は家屋から出た。頭目と夫人はクマタカの羽と百合の花が飾られた冠を被り、華麗な民族衣装を着用していた。頭目の LK 氏は民族衣装の外にやや漢族風に見られる派手な羽織をも着ていた。

LK 氏はまず、ルカイ語で観光客に歓迎の挨拶をし、その後観光ガイドが中国語で通訳した¹⁴。そして、LK 氏は観光客を屋内に案内し頭目の地位を象徴する壺を観光客たちに触らせて、夫人が観光客と 1 人ずつ握手して歓迎した。そこで、観光ガイドはルカイにおける頭目家の壺の意味を紹介した。観光客は頭目夫婦と多くの記念写真を撮影した。その後、頭目夫婦、観光ガイドと観光客たちが家屋の外に庭に戻り、そこで観光客を歓迎し、観光客の健康を祈る儀礼を行った。この儀礼は、昔村外の者が村に入る際に行われる儀礼であったが、日本植民地期から形骸化した。庭で観光ガイドがまず儀礼の内容を説明し、観光客にアワ酒とビンロウを配った。そして LK 氏がルカイ語で観光客の健康を祈り、観光ガイドがその発言を通訳し、ビンロウを食べる際の注意事項を説明した。観光客たちアワ酒とビンロウを飲食した後、観光客一行と頭目夫婦が頭目家屋の外にある「大頭目」と書いてあった石碑の前で記念写真を撮った。その後、観光ガイドの案内で次の観光スポットに移動した。

この団体ツアーは、コチャボガン出身の 40 代男性 NG 氏が設立した NGO「ルカイ産業促進協会（仮称）」が企画運営した。NG 氏は大学教育を受け、都市での勤務を経てから故郷で起業した青年エリートであり、地方議員に当選した経験もある。同 NGO は NG 氏と観光ガイドの女性をはじめ、都市での就学・就労経験のある青年たちが中心として運営されている。一方、頭目 LK 氏も NGO の会員であるが、観光の企画運営に関するノウハウがないため、周縁的な立場に置かれている。上記した頭目家での歓迎儀礼は 2010 年代から行われている。歓迎儀礼を行う度に、頭目 LK 氏夫婦は一定の謝金をもらい、観光から経済的な恩恵を受けている。一方、この観光ツアーのなかで、頭目は能動的な行動者というより、青年エリートたちがリードする観光産業のなかでの「観光資源」とされていると言ってもよい。

(3) 観光をリードする頭目

上記のように、ルカイの頭目が所有する模様、器具、家屋、ひいては個人そのものは、観光資源としてルカイの文化観光産業で利用されている状況が数多く見られる。そのなかで、頭目（特に高齢者の頭目）は観光の企画運営に周縁的な立場に置かれて消極的な行動をとっている場合が多い。一方、次の 2 つの事例で見られるように、自ら積極的に行動し、自分自身の地位身分の資源化しながら、村落の観光産業をリードする頭目もいる。

1) アデルの頭目ラブラス・アパリュース氏の事例

ルカイの村落・アデルの頭目ラブラス・アパリュース（漢語名、包基成）氏は、今日のルカイにおいて最も有名な頭目の 1 人であり、文化観光のみならず、政治活動において活躍している人物である。彼は、2006 年に国立屏東科技大学に提出し修士論文（包 2006）の中で、自身が 2001 年から 2006 年までアデルで行った村落の再建とエコツアーの推進に関する一連の活動を事例として取り上げ、原住民族村落における持続可能な開発の可能性を論じている。

ラブラス氏は高等教育を受けた都市原住民族の成功者とも言える。彼は 8 歳の頃に就学のためにアデルから屏東市に移住し、師範専門学校、師範大学を経て、屏東市にある中学校で国語科の教師を務めた。1994 年からその

¹⁴ LK 氏は中国語を流暢に話せるが、ルカイ語を話すのはあえてルカイらしさや真正性を作り出す意図があると考えられる。

中学校の教務主任をも担当した（包 2006：374）。2001 年以降、彼は屏東市で仕事をしながら、「第六代目大頭目の跡継ぎ」として、アデルでの村落の再建、伝統文化の復興および観光産業の推進など、様々な事業に取り組んだ。彼は多様な民間団体の企画への参与である。彼は論文の中で、主に「アデル社区発展協会」の諸事業、アデルにおけるルカイ語教育の推進事業、および 2005 年の震災後「アデル部落再建委員会」による村落の再建事業といった三つの事例を取り上げて紹介している（包 2006：285-300）。

さらに、ラブラス氏は、アデルでの観光活動、とりわけ伝統文化の解説にも積極的に取り組んだ。論文の中で、彼は自分が行った観光活動のスケジュールと、伝統文化の解説のテキストを詳細に報告し、アデルにおけるエコツアーの計画も提案した（包 2006：355-357, 373-410）。文化観光において、彼は頭目家が所有する各種の有形・無形文化財を観光資源化している。例えば、彼はルカイの伝統住居であるスレート家屋、人形の石板がある前庭、古壺などの物質文化を積極的に観光のメインスポットとして取り入れた。また、自ら頭目としての伝統文化の解説を観光活動の一環として取り入れ、頭目家の系譜、神話や象徴的特権などを紹介している。

これらの取り組みによって、ラブラスの影響力はアデルに限らずルカイの他の村々にも及んでいる。彼が、2017 年にルカイ民族議会の主席に選ばれたことはその証拠の一つであろう。

2) クンガダワンの頭目 NL 氏の事例

前項で紹介したクンガダワンの元頭目 NL 氏は、観光産業に積極的に関わり、村落の観光産業をリードするもう 1 人のルカイ頭目である。1990 年代から、クンガダワンでの文化観光産業の発展とともに、頭目 L 家の出身者と近親者には観光産業に従事する人が多い。そのなかでは、やはり NL 氏が代表的であった。NL 氏は遠洋航海業と台北での会社勤務を経て、1990 年代にクンガダワンに戻り、茂林国家風景区の管理处で就職した。そこで観光産業に関する経験を積んだ後、文化観光に進出した。彼は司会者や観光ガイド、観光イベントの企画、観光客向けのレストラン・喫茶店の経営などの仕事に携わっていた。そして、前述したように、彼は社区発展協会の会員として、「黒米祭」の企画と運営にも参与し、祭典で「頭目役」を扮した。

2014 年、NL 氏は平民層が中心とした発展協会と軋轢が生じ、近親者たちを連れて発展協会から離脱して、NGO「クンガダワン文化促進協会（仮称、以下、文化協会と略す）」を設立した。同協会は NL 氏が理事長を務め、文章作成に長ける分家出身の女性が総幹事を務めていた。主な会員は頭目家の近親者と友人が構成している。名目上村民全体を構成主体とし、実際に平民層が中心とする発展協会と対照的に、文化協会は個人が運営する協会と認識されている。協会の会員は創設者の NL 氏をはじめ、L 頭目家の関係者、または他の貴族層の出身者が多いため、クンガダワンの人々から「発展協会が平民系、文化協会が貴族系」や「文化協会が頭目の協会」であると認識されている。

文化協会は主に観光産業の推進と伝統文化の振興を目的としている。観光の仕事は主に NL 氏が協会の名義や個人名義で引き受けるか、または行政機関の観光プロジェクトに申請して引き受ける。観光活動の主な内容には村落周辺の観光スポットの案内、民族文化の解説に加え、伝統文化の体験、食事や宿泊の手配などがある。これらの仕事は、主に協会の会員である「頭目家族」の出身者やその友人に配分される。

NL 氏が観光ガイドを務めたツアーでは、彼は「頭目家屋」である自宅や近親者の家屋、家屋にある石彫、木彫、ペインティングなどを案内し、自ら所有する民族衣装、壺、刀、猟銃などの道具も活用した。例えば、頭目家屋の前庭に人形の石板があり、その前の席はかつて会議の際に頭目が座る場所である。彼は、クマタカの羽のある冠のある頭目用の伝統衣装を観光客に着用させ、人形の石板に座らせて記念写真を撮る。このように観光客を頭目に扮装させて記念写真を撮らせることを自分の観光ガイドの特色としていた¹⁵。

2015 年に、長年黒米祭を企画運営している発展協会は理事長の改選などの問題で活動停止になった。その代わりに、文化協会が黒米祭を運営するようになった。NL 氏は、協会の理事長として自ら祭典の内容を考案し、運営に携わった。黒米祭の運営において、祭典での出演や会場の設置などに、村民たちと雇用関係を結び、仕事の内

¹⁵ このような観光活動は、伝統文化を破壊したという理由で一部の村民の不満を招いている。

容を配分する。そして、黒米祭の場において、NL 氏は頭目として祭典に出席するだけでなく、自ら司会進行役を務め、指揮を執っていた。近年の黒米祭にとって、彼は中心的な人物であると認識されている。

彼は司会の才能に優れ、話術が巧みでユーモアに溢れ、いつも会場を盛り上げ、観光客に高く評価された。さらに、頭目というエキゾチックな身分も、観光客の興味関心を引き起こす絶好の売りどころであるとクンガダワンの人々に評価されている。彼はいつも祭典をスムーズに進行すると同時に、村落外での黒米祭の知名度の向上にも大いに貢献したと評価されている。彼は司会進行と企画運営をうまく完遂することを通して、村落外での黒米祭の知名度の向上にも大いに貢献したと評価されている。黒米祭を成功させたと同時に、自分自身が頭目として知名度を上げ、地位を顕在化させていた。

NL 氏が 2019 年に 52 歳の若さで急死した後、彼の弟が文化協会の理事長となった。今日に至り、L 頭目家とその近親者が依然としてクンガダワンの「黒米祭」の企画と運営において中心的な役割を果たしている。このように、NL 氏は NGO（協会）という近代的な組織を通して、ただ「頭目役」を扮する一役者から司会者を経て、祭典の企画運営者および指導者になり、クンガダワンの代表的な伝統文化と認識される黒米祭の開催に主導的な立場に立つようになった。それを通して、クンガダワンにおける L 頭目家の伝統的な地位と権威を維持し、向上させることを遂げた。

6. 結論：文化観光産業における頭目の「接ぎ木」

本論文では、台湾原住民族の観光史をおさえながら、ルカイの伝統社会権威者である頭目と文化観光と間にある多岐にわたる絡み合いをそれぞれの歴史背景に位置づけて整理し考察してきた。

日本植民地期の前半（1895-1920s）において、ルカイの頭目は間接統治のための懐柔の対象とされており、その地位と権力は制限されながらある程度の支持を受けていた。この背景の下で、懐柔（同時に威喝）の手段となる「内地観光」は、頭目の地位を顕在化させ、村落における権力と権威の裏付けとなっていた。しかし、1920 年代後半になると、原住民族村落への直接統治の浸透および日本語教育の普及につれて、植民地行政は日本語教育を受けた原住民青年エリートを村落の権力構造の中心に押し付け、頭目が代表とした伝統的な社会組織の解体を推し進めた。観光というものは一転して、原住民族村落における青年エリートの権威を支える外来の新たな価値論理の裏付けとなり、頭目の在来の権力と権威の弱体化を促すものと変わった。

戦後における一連の急速的な社会変化の下で、ルカイの伝統的な社会組織の解体と頭目権威の低下は長い間促されており、頭目と観光と間の絡み合いは見受けられなかった。一方、1990 年代以降、ルカイの諸村落における伝統文化の復興と文化観光産業の推進の風潮のなかで、頭目が特権として所有していた各種の物質文化は村落共有の伝統文化として資源化され、特権的な装飾物を通して可視化されていた貴族と平民の間の差異とそれに基づいた伝統的な社会階層の秩序が否定されるようになった（ブダイの事例）。さらに、個人としての頭目そのものも文化観光の「伝統らしさ」と「真正性」を保証するシンボルとして資源化され、文化産業のなかで受動的な立場に置かれている（クンガダワン、コチャボガンの事例）。このような風潮のなかで、頭目というものは従来の身分階層の秩序から分断され、伝統文化と結びついた形で象徴化されている。

「頭目の象徴化」や「頭目の伝統文化化」と呼ばれるこの風潮は、装飾特権をはじめとした頭目の伝統的な権力の喪失を促していながら、一部の頭目に個人の能力を発揮する機会をも提供している。事例の紹介したアデルの頭目ラプラス氏とクンガダワンの頭目 NL 氏のように、彼らは頭目という生得的な地位と個人の能力を駆使し、積極的に政治運動や文化観光産業、NGO などに関与し、知名度と発言力を向上させている。これらの外来の論理や制度、組織をうまく利用し、伝統的な地位と権威を支えるための新たな土台を築き上げている¹⁶。

以上の議論から、観光をはじめとした文化産業はルカイの伝統的な社会制度に対して、ただ単に表面的な影響を与えるのではなく、むしろその根底にある論理そのものを揺るがしたり、もしくはそれを支える新たな論理を提供したりすることが言える。このような絡み合いについて、筆者は別稿（尤 2023）の中で「接ぎ木」（grafting）

¹⁶ このような状況は、ルカイと類似した頭目制度をもつパイワン社会にも見受けられている（呉 2011）。

と名づけている。つまり、植民地化と近代化に伴い、伝統的な権威者である頭目は従来、基づいた論理と制度を失い、頭目という地位が従来の身分階層の秩序から分断された。それにより、頭目の地位は「根っこ」のない「穂木」のようなものになった。一方、個々の頭目たちは文化観光などの近代的な場面において、個人の能力を駆使して積極的な文化実践を通して、生得的な地位を「協会」・NGO など、近代的な社会組織に接ぎ合わせている。頭目の地位という「穂木」を、近代的な論理と社会組織が主流を占める原住民族村落の現代的な社会状況という異種な「台木」に接ぎ合わせて、地位に基づく組織的な基盤を新たに創り出している。

さらに、このような「接ぎ木」の過程のなかで、「穂木」である頭目の地位と、異種な「台木」である原住民族村落の現代的な社会状況は接ぎ合いながら、相互作用を与え合い、互いの変容をも促している。を通して、新たな原住民文化が生み出されるのである。

【謝辞】

本稿のための調査は、JSPS 科研費（課題番号：24K16233、JP18J21025）の助成を受け、中央研究院民族学研究所・訪問学員の身分を得ることによって可能になりました。現地調査の遂行には、クンガダワン、テルルカ、コチャボガン、ブダイの方々のご協力がなければ実現できません。調査にご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 王長華 (1985) 「魯凱族階層制度及其演變：以多納為例的初步探討」『思與言』23 (2)、pp.137-152
- 王美青 (2013) 「高雄市茂林區魯凱族下三社群の族群藝術與文化資源」『高雄文獻』3 (3)、pp.30-50
- 王美青 (2015) 「魯凱族階層制度及其演變：以多納為例的初步探討」『高雄文獻』5 (1)、pp.39-62
- 汪明輝著・森岡ゆかり訳 (2006) 「台湾原住民族運動の回顧と展望：えてツォウ族の運動体験について」『立命館地理学』(18)、pp.17-28
- 汪明輝 (ティブスング・エ・バヤヤナ・ベオンシ) 著・雨森直也訳 (2014) 「21 世紀台湾政党競合下における原住民族観光の発展と政治的含意」『観光学評論』2 (2)、pp.125-142
- 小槻文洋・河村悟郎・身玉山宗三郎・尤驍・金世徳 (2024) 『楽しむ力とツーリズム』晃洋書房
- 笠原政治 (1993) 「私たちの結婚はまるで喧嘩のようだ：台湾ルカイ社会における地位ハイアラキーと配偶選択の過程」『横浜国立大学人文紀要 (第 1 類哲学社会学)』9(39)、pp.101-122
- 笠原政治 (1998) 「ルカイ (魯凱族)」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究への招待』風響社、pp.93-97
- 笠原政治 (2005) 「ルカイ：華麗な造形文化とアイデンティティの軋み」末成道男・曾士才編『講座 世界の先住民族：ファーストハンド・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、pp.171-184
- 紀駿傑 (1998) 「從觀光原住民到原住民自主觀光」中華民國戶外遊憩學會・臺灣原住民文教基金會編『原住民文化與觀光休閒發展學術研討會論文集』中華民國戶外遊憩學會、pp.45-60
- 紀駿傑 (2005) 「原住民研究與原漢關係：後殖民觀點之回顧」『國家政策季刊』4 (3)、pp.5-28
- 許功明 (1991) 『魯凱族的文化與藝術』稻鄉出版社
- クリフォード J. 著・太田好信ほか訳 (2003) 『文化の窮状：二十世紀の民族誌、文学、芸術』人文書院
- 吳清生 (2011) 「原住民頭目制度淡化對文化保存的衝擊：以東排灣族 Tjaqau 部落為例」國立臺東大學區域政策與發展研究所公共事務管理在職專班碩士論文。
- 胡台麗 (1997) 「文化真實與展演：賽夏、排灣經驗」『中央研究院民族學研究所集刊』(84)、pp.61-86
- 近藤正己 (1996) 『総力戦と台湾：日本植民地崩壊の研究』刀水書房
- 謝世忠 (1994a) 『「山胞觀光」：當代山地文化展現の人類學詮釋』自立晚報社文化出版部
- 謝世忠 (1994b) 「觀光過程與「傳統」論述：原住民的文化意識」行政院文化建設委員會編『原住民文化會議論文集』文建會、pp.1-18
- 謝世忠 (2017(1987)) 『認同的汚名：臺灣原住民的族群變遷』玉山社
- 台邦・撒沙勒 (1993) 「廢墟故郷の重生——從《高山青》到部落主義：一個原住民運動者的觀察和反省」『台灣史料研究』(2)、pp.28-40
- 台湾総督府警察本署編 (1989 (1918)) 『理蕃誌稿 第一卷』緑蔭書房
- 台湾総督府警務局理蕃課編 (1993) 『理蕃の友 第一卷』緑蔭書房
- 卓幸君 (2017) 「文化観光之所以可能：旭海部落的實踐歷程」『臺東大學人文學報』4 (2)、pp.77-113
- 竹尾茂樹 (2008) 「台湾における「少数民族観光」の現状と課題」『PRIME』(28)、pp.77-87
- 張瑋琦・植田憲・宮崎清 (2003) 「日本統治時代における台湾の原住民族観光の形成」『総合観光研究』(2)、pp.47-55
- 張瑋琦・植田憲・宮崎清 (2006) 「原住民地域における観光デザインの役割と方針：台湾花蓮県の阿美族集落：太巴朗と馬太

- 鞍における原住民族観光の実態比較を通して』『デザイン学研究』53 (2)、pp.49-58
- 陳銀鳳 (2014)「日據時代以來魯凱族下三社茂林部落的社會變遷」國立東華大學民族發展與社會工作學系碩士論文
- 陳彥君・陳澄世 (2014)「獵人學校中的形塑文化：以台東鸞山、拉勞藍部落、花蓮水璉部落為例」『台灣原住民族研究季刊』7 (3)、pp.39-81
- 陳正豐 (2016)「原住民部落文化觀光發展之再現與衝突：以霧台部落為例」國立東華大學族群關係與文化研究所碩士論文
- 鄭安暉編 (2021)『蕃人觀光日誌』國立臺灣圖書館
- 鄭政誠 (2005)『認識他者的天空：日治時期臺灣原住民的觀光行旅』博揚文化
- 野林厚志・宮岡真央子 (2009)「台湾先住民とは誰か：原住民族の分類史と〈伝統領域〉概念からみる台湾の先住性」窪田幸子・野林厚志編『「先住民」とはだれか?』世界思想社、pp.293-317
- 塙鯤南 (1898)「蕃社の風俗及び生活の状態」『東京人類學會雜誌』13 (149)、pp.439-452
- 包基成 (2006)「原住民部落永續發展與經營之探討：以屏東縣霧台鄉阿禮部落再造之行動研究為例」國立屏東科技大學高階經營管理碩士在職專班碩士論文
- 松岡格 (2012)『台湾原住民族社会の地方化：マイノリティの 20 世紀』有志社
- 松田京子 (2014)『帝国の思考：日本「帝国」と台湾原住民』研文出版
- 馬淵東一 (1974 (1941))「山地高砂族の地理的知識と社会・政治組織」『馬淵東一著作集 (第一卷)』社会思想社、pp.237-283
- 茂林鄉公所編 (2008)『茂林鄉誌』高雄縣茂林鄉公所
- 山路勝彦 (1991)「面子とハイラーキー：台湾ルカイ族の首長制」『関西学院大学社会学部紀要』(63)、pp.201-242
- 尤驍 (2018)「現代社会におけるルカイ大頭目の権威の再構築：「伝統のシンボル」と「利他的な貢献者」」『台湾原住民研究』(22)、pp.52-84
- 尤驍 (2020)「現代社会におけるルカイ首長の権威と家族：近代化による変容ならびに Kongadavane の黒米祭に注目して」『台湾原住民研究』(24)、pp.81-117
- 尤驍 (2022)「台湾原住民族の文化復興と文化産業化をめぐる諸問題：ルカイ・クンガダワンの黒米祭の事例を通して」『神戸文化人類学研究』(6)、pp.12-36
- 尤驍 (2023)「台湾原住民族運動後の部落に生きる「現代頭目」：台湾原住民族ルカイの伝統と権威をめぐるポリティクスの民族誌」神戸大学大学院国際文化学研究科博士学位論文 (未公刊)
- 楊淑媛 (2011)「文化自我意識與傳統的再創造：以布農人為例的研究」『臺灣人類學刊』9 (2)、pp.55-92
- ヤユツ ナバイ (2009)「台湾原住民族部落スマグスにおける観光事業と多文化教育：タイヤル住民の「部落を教室にする」実践」『日本台湾学会報』(11)、pp.177-198
- 呂吳國強 (2020)「原住民族観光與傳統祭儀之衝突：以排灣族為例」正修科技大學休閒與運動管理系碩士班碩士論文